

一、はじめに

1. 記述の目的

身振の、機構や体系について記述したものは少いようである。手話を「ろう」の身振や表情による記号と考えるが、これについても同様である。

通達の手段としては言語が重く見られるのは当然であろう。しかし言語のみで通達が十分とはいえない。言語のほかには立場、表情、身振、態容などの関与することが多いからである。

「ろう」においては表情や身振が殊に重要である。今日、「ろう」に對し言語の指導がなされその効果には疑るべきものがあるようである。しかし聾者の間では手話を手段とするのが普通である。手話は「ろう」に取って母語的なものである。

先学の研究を参照するいと手もなく不備なこの小稿をつづるのは、身振の典型である手話の概要をうかがひ、記号における身振と言語との関係と求め「ろう」言語の指導に役立つてあるう実態をつかむにある。

2. 調査の方法

ここに記述しようとする手話の実態は僅か数名の被調査者から得たものである。特に石川ろう学校高等部三年生、津水第一通からのものがその大部分を占める。従つて個人的であつたり地方的であつたりする誤れがないわけではない。

調査は多少の観念も含むが、大部は質問によつた。被調査者にノートの項目を見せ答えて貰つた。口話や手話で質問を補つたものもある。教えられた手話の形式は相手の誤解を受け確認を試みた。しかし外形や内容に間違いないとはいへない。

項目は話素（有意味的外形の単位）、話素（意義単位の連合関係）、話法（意義単位の結合関係）に分けて見たが、思ひつき程度にすぎない。話素の整理において林大氏の分類論彙教を参照出来、幸であつた。

手話の形式には被調査者が「ない」。或は「知らない」と答えたものばかりである。しかし此の著についても

同様とはいえない。また高等部三年生であるため米、ソなどの国名を手話で表示するが、教養のない階層では、このようなものに手話がないかも知れない。さらに耳鳴などの差異も想像出来る。耳鳴と共に「岩」が「石」から分離する例があるからである。

このように欠点は多いが、手話の概略をある程度知り得るであろうか。

二、手話の性質

1、記号とその分類

記号は何かを表し、連立の機能を果たす機構である。表わそうとする内容が、何等かの外形によって示される。この内容を形記、この外形を能記と呼ぶことが出来る。記号にはこの両面がある。記号によって連立が可能であるのは集団において能記が、大体固定しまた所記との関係が大体固定しているからである。

記号はなく見るなら人間が、生存をつづけるために取る行動の一つであるといえよう。一面心理的であり、他面社会的である。記号は表するに表現的機能である。人間の動作や行動には連動的なもの、情動的なものがある。また本能的なもの、知性的なものがある。これらは人間が外界に適応する諸種の様式にすぎない。記号は行動の一つとしてこれらの様式と系列をなし、被選にからみ合うであらう。

記号はかたに人間の表現行動であるが、いま何かに興味をつけることを主にするなら様々なものがある。(4) 春の花をさすみと眺め、小鳥のさえずりを羽の祝福と聞き、風を人の訪いと感じ、露る月が泣いていると考えることがある。しかしこれは勝手に趣味をつけたにすぎない。ゆまた足跡を見て人の忍び込んだ様子を見出し、シクシクと泣く声、サメサメと流す涙からその悲しさを想像する。しかしこれは何かを知らそうとしたのではない。いさらに手を振って不能を示し、握手であいさつを交わす。語せはものが分り、喜けは用事を達する。サイレンで正午を知り、報鐘で危殆を伝える。これはたしかに何かを伝えようとする機構である。

二のように趣味をつけ得るものは様々であるが、記号は集団の取る有様行動である。

記号は亦二に集團における慣習であるが、いま広く慣習を考へるなら、これにも様々なものがある。(1)食事・住宅・衣服などは集團によつて様式を要にする。(2)芸術・信仰・經濟などにおける慣行や約束についても同様である。浴衣を褌がえしに着、食物を手でつまみ、畳の上で上足で歩いてゐても善悪を言はない筈であるが、慣行はこれを許さない。千円札は包紙にもならないのに包紙を数多く置けるのは約束が然らしめる。

記号もこのような慣行の一つであるが、その用途は表現を補助する裏にある。記号は立場を表現、理解する手段となり手がかりを与えるが、通達さ可能ならしめるのは集團が一つの規模をもち他の記号と相補うからである。要するに記号は(1)立場的條件がある。(2)表現的行動である。(3)慣習的規模である。(4)体系的組織をもつ。(5)他の記号と并用される。

記号が、何を手段とするかによつて(1)身振、(2)言語、(3)符号、(4)信号の四つに分け得る。身振といつても時には表情を含ませてよい。言語には文字や符号が必ずびつく。符号としては数字などの記号、所有を示す標記、商業に使う符號、表音や視覚の記号、距離のための縮略、家がらを示す故事などを一括する。信号としては気象や鉄道の標識、海上や軍事の信号がある。

要するに(1)身振は体的動作に關係がある。(2)言語は音声や文字を使う。(3)符号は文字と繪圖の中間といえようか。(4)信号は体的手段によることの少ないものである。しかしこの分類がすべてを充分説明出来るとは限らないであらう。

2. 手話とその構成

身振は体的変化を利用する。音声の代りに動作を使うのが、その特徴である。広義では目つき、顔つきなどの表情をも含め得る。言語に比べ複雑な表現が出来ないというよりは、むしろ機構として別で他の分野を担当するといふべきであらうか。

身振は世界に亘るといふ。外形と内容の關係が言語とちがひ、普遍性をほとんどもたないからである。しかし身振がすべての地域にわたり完全に一致するとはいへない。身振も慣習の一つであるから集團によつて差異がある。「あいさつ」の仕方や「こちらへ／＼」の向き方が、日本と欧米でちがうのはこの例とならう。

筆者でなくても身振を成す。聴者では言語との併用が多い。このため身振は言語の補助手段と見られがちである。ところが身振のみで用を盡すことがある。この典型は「ろう」に見られる。手話はこのような身振に対する名称である。従って身振は独自の表現と体系をもつ筈である。

身振で成す動作は主に指や手によるが、頭部や上身も使う。身振の(1)指示、(2)模倣、(3)象徴、(4)暗示などに分け得る。要するに指示と描写であるが、その描写は事物的なものから心理的なものまで様々である。

身振の特徴は言語障礙をもつ韓者に最もよく表われる。筆者の手話は聴者の身振と本能的に別のものであるが、その相違点は言語から独立している点にある。「ろう」に取って手話が母語ともいえるのはこのためである。「ろう」は手話を活用し表現を表現に役立たせようとする。

手話は動作だけではなく、表情も含んでいる。表情は普通心理的なものであろうが、「ろう」では能動的である。その理由は喜怒哀楽の感情が、自然に流露するのではなく、喜怒哀楽の概念が顔面をもつて一つの外形として表現せよとするからである。「ろう」ではこの表情が身振と併用され身振の短所を補っている。身振や表情の記号としての典型は、「ろう」の手話に見られる。

言語については、外形を音節、内容を意味に分けることがある。手話においても似たことがいえる。いま手話の外形を話形、内容を話意と呼ぶことが出来る。また原語では音韻、語彙、語法という用語が使われる。手話にもこれと似たものを考え得る。いま言語の音韻、語彙、語法に当る手話の用語に語彙、語彙、語法を仮に代って見ることとする。

三、話 彙

話形は複雑に見える。しかし通義をもつ外形をみつめ、これを整理することによって、話彙と名づけたものがある。程度つかぬことが出来る。と考える。

例えば(1)指を一本垂直に立てても、また上下に動かしても通義は同じようである。(例、オ一指、オ二指

Ⅱ上、才三指Ⅰ完、才四指Ⅰ始、才五指Ⅰ女Ⅰしかしその指を曲げたり、蹠を引いたりすると蹠義がちがつて来る。ところが水平にしたり、たゞ振ったり、蹠を曲げたり、水平においた指を上下に動かしたりしたのでは蹠義をいふに足らないようである。

(四)両手を上下(例Ⅱ「ふえる」)、左右(Ⅱ「長い」)、前後(Ⅱ「はなれる」)に動かすことによつて蹠義はちがつて来る。両き方も少くすると別の内容をもつことがある。(例、上下に少し開くⅡ背が小さい、左右に少し開くⅡ短い)両手をはなしたまゝで上の手を上に移す(Ⅱ「立つ」)のど下の手を下に移す(Ⅱ「開ける」)のは蹠義の姿で一つの話形である。

手話で積極的に使うのは手と指であるが、他の部分も使う。これらは一定の型式、位置、動作を取る。また消極的ともいえるが、大切なものに表情がある。表情を無視した手話による表現や理解はあり得ない。聴者の使う手話は聾者に分りにくいのは弊が充分でないこともあろうが表情に欠けるところがあるからであらう。

1. 指

指は五本とも蹠義がある。(例、才一指Ⅱ男)これを上下に動かして、曲げたりする。(例、才一指を曲げるⅡ五〇)指示することもある。(例、人形表示は才二指の指示による)才二指でX・Oなども書く。五指を開けば「花」握れば「石」となる。指と指で一つの語彙をつくる。これに片手の時と両手の時がある。(例、片手の才一、二指で「同じ」、両手の才五指で「約束」)

指をどこかにあて、なで、すべらせ、たたいたりなどする。なでるのとたたくのではちがうものがあるようである。例えは蹠をなでるようにすれば「頼」たたくようにすれば「頭痛」となる。耳を引けば「耳」であるが、たたくば「聞えないう」になるという。またある場所へ指をもつて行くにしても一本と二本とではちがうことがある。例えは肩のところに才二指をおき後をさすと「昨日」、才二、三指の二本では「一昨日」となる。目のところで才二指を両側で動かせば「明日」、才二、三指の二本では「頭後日」となる。

2. 手

片手を扱うにも蹠々である。手の平を上には指を前にすると「差しあげる」、手の平を左には指を前にすると「一

所懸命、手の平を前に指を上にする、「ハイノ」となる。

動かし方によつてもちがう。手を開いたままで左に振れば「だめ」であるが、左右に振ると「分らない」である。手の平を下にして下を押さえるようにすると「場所」などを示し、手をうらがえし平を上にする、「しかし」になる。

手を開いたままで頭の發のところにあてると「しまった」となり両手または片手の平で胸を上から下に打てる。「分りました」、手のひらをあごにあて「まことにどうも」を示すようである。

拳を扱うのもある、例えは頬へあてれば「けんか」、耳にあてれば「電話」、腹をたたけば、「おかしい」、拳を前へ動かすと「銀行」、拳で胸をたたきその手を開くと「知っていますか」となる。

両手を扱うのはより複雑なようである。両手の平を合わせ空直に指を前にすると「すみません」、これを指をけ上にする「拜む」となる。指先を離合させると「真」や「わに」を意味するという。

また、一方の手の甲を下に、他方の手の平をその上へ並直におき大板でも切るようにする。「まご」とヒのや上の手をそのまゝ動かさないでおく（「ありがとう」）のがある。一方の平に他方の甲をのせ上の手でたたき（「下さい」）上の手をすべらせ（「どうぞ」）たりする。

さらに指先をなしたままで、両手の手首だけを打てば「分敗矣」、向き合わせの両手を前後に開けば「別れる」になる。

3. 頭など

この類は少いようである。頭を左右に振り「ちがう」、前後に動かし「そうだし」を示す。また上身を前にかいめて「あいさつ」、片腕を張って「我がまま」、両腕を広めて「戒める」、両腕をすぼめて「虚勢」を示す。

4. 表情

表情は活劇であるかどうかは疑問がある。なぜなら「うれしい」（「胸をなでる」）「かなしい」（「胸をかく」）「笑う」（「指先を丸め口前で動かす」）「怒る」（「二指を鬼の角のように立てる」）などは身振の形態をもつからである。

しかし「行け／＼」や「行きたい」は「行く」の身振の語形と「命令」や「希望」の表情の語形とでも名づくべきものとが混合した形式を取ると考えられる。このような形式は「甘い」や「辛い」にもあるようである。殊に「うれしい」や「かなしい」は身振の語形をもつにも拘らず表情の拌わない場合その理解が困難なようである。とにかく表情を欠いた手話の分りにくいのは事実である。このため「ろ／＼」の表情を語彙と仮定するのが便利だと考える。

x

x

x

x

x

なお、語形としては指だけさ水平にしたり、振ったり、指で弧を描くことではないようである。指示する以外は指先を左や右に向けることはない。また、片手のカ一指をカ三、四、五指に合わせ、両手のカ一指をカ一指に、カ二指をカ二指に、一方の甲を他方の甲に合わせることもないようである。

語形のうち、身振は指示と縮写である。具体的にば語彙の項に羅列する。また表情は表意好悪や評的表現に關聯するが、語彙の項で多少缺れるであろう。

四、語彙

知らないと思えたものに次のようなものがあった。聞き方の悪かった語もあろう。

1. 貴族、殺人、盲人、商人など
2. 親切、生命、動物、命令など
3. 家具、香煙、国民、地理など
4. ロンドン、パリ、ベルリンなど
5. にらす、味わう、端など
6. 贈、謝、鯉、鰻など

名形の知り得たものを次に羅列する。

し、(1) 髣・見る・取る・走る

頭||指示へ||たたく。

髣||指示へ||つませ、或はたたく。

髣||指示へ||指をさする。

まゆ||指示

目||指示

眼珠||指示

まつげ||指示

耳||指示 (||引く)

頬||指示

鼻||指示

口||指示

くちびる||指示

舌||指示

歯||指示

あご||指示

のど||指示

肩||指示

手||指示

胸||指示

心臓||指示

腹 〓 指示

腰 〓 指示

尻 〓 指示

足 〓 指示 …… (一一一)

頭痛 〓 額をたたく

見る 〓 目のところでオニ指を、指先を上へ、垂直にしておき、やがて指先を前に水平に移動す。

読む 〓 左の手の平をオニ指で文字を書くような類似をする。

起きる 〓 手枕をなし、手を下から上にする。

泣く 〓 オ一、二指を目の下から下方へすべらせる。

めくら 〓 オ二、三指で鼻の上をばさむ。

涙 〓 オニ指を目の所から下へ、「泣く」とは区別がある。

聞く 〓 オニ指で耳を打つ。

嗅ぐ 〓 オ二、三指を鼻の所へつけ、次にはなす。これを二三回行う。

飲む 〓 指先を丸め、口の所で飲むかたち、飲む音まで出る。

話す 〓 オニ指で口の所を打つ。

歌う 〓 口の前で開いた手をユラユラさせ、歌うかたち。

笑う 〓 五指を上げ、口の所で動かす。表情が様う。

嘘 〓 口の所で上げめた五指を開く。

接吻 〓 両手でオ一指オ五指の接吻

熱を見る 〓 額に手の平をあてる

空腹 〓 両手で腹を上下になぜ、次にその手をはねのける。

満腹 〓 飯を食べ腹の大きくなつたかたちをする。

左腕―腰の大きいかたちをする。

真―尻の所で真の勢ちるかたち。

小腰―左手の才二、三指の間から右手の才二指を前方に出し、肩節の前でこの才二指を動かす。

新氣―拳で額をたたく。

垢―左手の甲を右手の拳でこすり、次にくちびるを指示する。……………〔一一三〕

とらえる―右手で左の甲をつかむ。

取る―取るかたちをする。

すてる―左の平から右手でものをすてるかたちをする。

切る―左の揃いた平を右手で切るかたち

ボ―ル―手を上下に動かす。

ままごと―左の甲を右の平で切るかたち。

刺る―指を額のところですべらせる。

理髪―指で頭のところを切りながらすべらせて行く。

なでる―左の拳を才一、二指のところになでる。

抓る―そのかたち。

なぐる―そのかたち。

書く―そのかたち。

掛ける―そのかたち。

着る―肩の所から両手を前へもつて来る。要するに着物を羽織るかたちであらう。

脱ぐ―はじめ両手をつばめ、つけておき、やがて両手を揃く。……………〔一一三〕

歩く―手の平の上に指を立て歩くかたち。指を移動させる。

走る―手を走るときのようにする。

登るⅡ綱をつかみながらのぼるかたち。

昇るⅡ両手のオ一、二指の四指で綱をつくり此の大指は離しておく。この太腿のかたちを上にする。
降りるⅡ左の平をオ二、三指で打ち、次に下を指示する

跳ぶⅡ手の平をオ二、三指で打ち、次に跳ぶかたちに動かす。

けるⅡそのかたち。……〔二一四〕

(四) 居る、思う、立泳、若い

あるⅡ手を胸を前または下を押さえるようにする。

居るⅡ手の平で下を押さえる

立つⅡそのかたち。「腰が立つ」時は腰を打ち「立つ」部分は左側による。

休むⅡはじめ両手の平を下にしておき、次にこの二つを合わせる。

幼くⅡ両手の平を上に乗かす

やめるⅡ片方の手の平で他方の手の平を垂直に打つ

行くⅡ指で前を示す。

急ぐⅡオ一、二指をつけておき、やがてオ一指の尻早く右から左へ引く。

通るⅡオ二指を左に動かす

素るⅡオ二指を手前に引く

踊るⅡ手の平の上に指先をつけ向うにはわるようにする。

進むⅡ片方の手の平へ他方の手をもつて行く。

はなれるⅡ両手を前後に開く。

乗るⅡ腰をかけるかたち。

泳ぐⅡそのかたち。……〔二一五〕

知るⅡ拳で胸をたたく。

思ふ一〇二指でこめかみをおさえる。
 かる一〇手をひろげ胸をなでる。

おぼえる一〇指で頭を打つ。

勉強する一〇指の近くで手の平を上下に動かす。……（一二三）

立派一〇手を昇の下におき、ひげのかたちをする。

丈夫一〇両手で拳をつくり、上下に動かす。

上手一〇腰を上から下になでる。

うまく一〇「上手」と同じである。

下手一〇腕を下から上になで、次にはねる。

馬鹿一〇一指を鼻へ、他の四指を開き、二の四指を動かす。

幸福一〇下唇の下をなでる。

貪食一〇一指の指腹であごをピンとはめる。

好き一〇のどをつまむ。

嫌い一〇一、二指で胸をつく。

正直一〇両手の一、二指で夫々輪をつくり、二つの輪を上下にはなしておき、やがて下から上に移動させる。

竹のかたちであらうか。

本当に一〇手のひらをあごにあてる。指先は前に向く。

まことに一〇「本当に」と同じ。……（一二三）

若い一〇手の平で額を左から右になでる。

心がよい一〇心臓をさし、次に拳を鼻につけ、やがてはなす。

やさしい一〇両手を腹につけ、指先を動かす。

おとなしい一〇両手を開いて、離かにはにつけおろす。

うれしい。胸をなでる。表情が様う。

さびしい。才一、二指をつけたまゝ、頬にあて次に二指をはなす。
欲しい。のどを引く。

悲しい。指先を丸め、胸をかきむしる。表情が様う。

おかしい。拳で頬をたたく。……〔二四〕

2 (4) 帽子・食物・家

帽子。手の平を頬にあてゝひさしのかたちをする。

着物。かきあわせるかたち。

洋服。胸をつまみなでる。

上衣。「着物」に同じ。

ズボン。両手で足をなで上げる。

靴。拳で手の平のつけもとをたたく。

外套。両手の拳で胸をうつ。ボタンの形であらう。

傘。傘をさす真似をする。……〔三一〕

食物。指をつぼめ口へ。または才二、三指で食べるかたち。

飯。才二、三指を口の所で食べるかたち。

汁。才一指を口。他の四指をはなし、飲むかたちをする。

肉。左手の甲の上を右手の才二、三指で切るかたち。「牛肉」は「牛」と「肉」。

パン。両手の才一、二指の四本で幾形をつくる。

塩。口の前に指をつぼめておき、頬から表情をする。「白」をつけてもよい。

醤油。才五指の指先を下方から口へ。少し指を両唇ではさむ。

味噌。才二、三、四指を出し、次に才二指を右上から左下へ。

昨「オ一、二、三指の三本を揃く。

砂煙「手の平を口の竹ではげしく動かす。「甘い」と縦ている。

油「髪をなでおろし、二指の指先を互にすべらせる。

茶碗「左手の平を台に右手で腕のかたち。

箸「オ二、三指を動かす。

湯「五指の指先を下にし、次にこの指先を下から上にあげる。

お茶「お茶を運びかたち。

酒「両手を拍ち、盃で飲むかたち。

菓子「五指をつぼの口の所へ。

孝飯「「氷」「夢」「まじった」「へり」片方の平を他方の平でダンゴをこねるようにする。「飯」の假合……

〔三三〕

家「両手の指で屋根のかたち。

屋根「一方の甲へ他方の平をのせ、斜めにたたくように動かす。

二階「オ二指で上を指示。

戸「左手の平に右手の平を垂直におく。

たゝみ「右手の脇へ左手の平をあてる。右腕は垂直にたゝみを糸でしめるかたちをする。

台所「右手の平で左手の甲を切るかたち、次に片手の平で下をおさえるようにして「場所」を示す。

風呂「右の掌で頬や腕をこする

机「そのかたちをする。

材木「「木」に同じ。

かラス「オ二、三指を目の前で動かす。……〔三三〕

道 手を手前から前方へやる

飛行機 右手の才一指と他の四指でコの字形をつくり、斜上前に進める。

汽車 左手の平の上に右手の才二、三指を出し輪を描きながら前進させる。

駅 左手の平に右手の才一指と他の四指でコの字形をつくつてのせる。「金又駅」は「金」と「駅」

鉄道 両手の指先を下にし、次に指先を前方に出す。

レール 片方の手の平を他方の才二、三指で打つ（「鉄」）、次に両手の才二、三指でレールのかたち。

電車 左の才二、三指の指腹を右の才二指ですべらせる。

自動車 両手共に才一、二指を直前に揃え、才二指の指先をつけておく。次に二の二指の先を前にはねる。

バス 文字で書くという。

自転車 ペダルをふまかたち。

車 手を腰において、引くかたち。「荷車」も同様である。

舟 両手で舟のかたち。

軍艦 才二、三指で頭上を前から後になで、次に「所」をつくる。

電話 耳のところへ手をやり、線のかたちもする。（「二二」）

紙 才二指で線を作る。

本 合わせた両手をひらく。

ノート 才二指でノートを置き、才二、三指を立てる。（「ノート」）という。

鉛筆 書く真似をする。

筆 左右の両手で夫々輪をつくり上と下におく（「リ」竹」）、次に左手の甲に右手の指をのせ書くかたち。

ペン インキをつけるかたちと書くかたちをする。

万年筆 左手の才二指を右手の才一、二、三指で万年筆のキャップでもとるようにし、次に書く真似。または

斯で類まであけ（「リ」青」）、次に書くかたち（「リ」鉛筆」）。

雙指 右手の才一指と他の四指で丁の字形、左手でこの対称形をつくり、二の二つを重なるようにする。

巫 黒（髪を指示）と、墨をするかたち。

インキ 頬を才二指の指背でなであげ左右の才一、二指の四指で輪をつくる。

消しゴム 潤すかたち

微 両手を交錯させる。……ハニニニ

留物 才一、二指をはさみ状に開き、右手ならば左から右に動かす。

お金 才一、二指で輪をつくり動かす。

五四 五指を兩き振るといふ。……ハニニニ

(3) (1) 父母、学校、僧侶、約束

男 才一指

女 才五指

大人 右手の五指を肩につけ、次にそのまゝ前におろして開く。手の平は上になる。

青年 両手の才一、二指の四指で橋田をつくり他の六指は離して伸ばす。

少年 両手の才三指の四出し、手背の所を拍つ。

少女 両手の才五指を出したまま、手背を拍つ。

子供 右手で胸より下の所を、甲を上、指を左にして軽く拍つ。

父 才一指で頬を後から前へなでる。

母 才五指で頬を後から前へなでる。

兄 才三指の指腹を手前にしながら上にする。

姉 才四指を上にする。

弟 才三指の指腹を手前に向け下におろす。

妹 才五指を下におろす。

人「文字を書くという。

友「手の平を合わせ、握るかたち

短「両手の才二指を頭の所で角のようにおく。……〔三一〕」

町「才一、五指のみ伸ばし他の三指は握る。このかたちの両手を交錯させる。

村「左手の平の下へ右手の才二指を指腹を下に付けておき前に出す。指先を曲げておく。

学校「両手をひろげ、指は上、平は後に少し動かす。

大学「はじめ顔のところに手をおく。手は甲が上、才二指を腕につける。これを両し、次に頭の横へもって行く。

中学「左手の才一、二指を右手の才二指でおさえ「中」の字形をつくる

小学「左手の才二、三指の面へ右手の才二指を入れ「小」の字形をつくる

幼稚園「手をたゞき、手を上にしたリ、下にしたリする。

寮「右手の才二指で左手の平の真中につき、左手の平をひるがえす。

市役所「市」の字を覚え、才一指を二本指腹の前にして立て、次に下へおろす。

病院「右手で腕をうち、次に左手の腕を見るかたち。

火葬場「右手の平を左手の平でうち、蓋を端にする。左手の才一指を腕の面から右手で腕の底へおろすか

たちをする。最後に右手の手で下をおく。

会社「左手の甲に右腕をまき文字を書くかたち。

社長「会社」と「長」の才一指を立てるの被合

官吏「右の腕のどこから右手を膝股でもつけるようにおろして来る。……〔三一〕」

先生「才一、二指をはさみ状にし、立てた才一指を水平に動かす

生徒「両手で才一、二指のはさみ状を二つづくり、腕のところで交互に上下させる。

巡査「才一、二指のはさみ状をつくり、才二指を腕につけ、次に才一指を下から上に動かす。

警察「才二指で腕をうち、次にその才二指で下をホソ板ンうつ。

あんまゝ両手でひねるかたち。……(三一三)

約束ゝ才五指の二本でちぎる。

相談ゝ両手の才一指を何い合わせに立て、腰かに動かして少し首をかしげる。
れゝ頭を上げる。旧陸軍の敬礼のかたちをしてよい。旧陸軍の〃擧げ銃〃をすれば「兵隊」だという。
拜むゝ手をすり拜むかたち。片手でもよいようである。

けんかゝ拳を願へ

教えるゝ才二、三指で胸をさす。

遊ぶゝ手の平で団子をこねるようにする。

おひなさまゝ両手をくむ

買うゝ左手の上に右手で輪をつくり先方へ出す

会うゝ才二指に才二指を並づける

待つゝ左胸を立て拳を上にする。次に右手でこの拳をおさえる。

分けるゝ二本の才二指を離して行く。

やるゝ手の平を上にして先方へ進める。

俯すゝ「やる」に同じ。

返えすゝ手の平を上にして手前へ引く。

勝つゝ手を上にあげる。

負けるゝ鼻を指先でなでる。

遠慮ゝ面筋をすぼめる。

自慢ゝ指で翳さしたく。

威張るゝ面筋をひろめる。

なまいきゝ腕を右へ動かす。

わがままに「なまゆぎ」に同じ。

おこる「オ」二指を鬼の角のように立てる。表情を伴う。……（三一四）

(四) 人名、地名

大町「大」(「文」字を書く)と「町」。

村井「村」(「オ」一指を離へ)と「井」(「両」手のオ二、三指で井げたのかたちをつくる)。

大村「大」と「村」。

中村「中」と「村」。

小村「小」と「村」。

山上「山」(「両」手で山のかたち)と「上」(「オ」二指で上を指示)。

山中「山」と「中」(「左」手のオ二、三指に右手のオ二指をおき、中々のかたちをする)。

山下「山」と「下」(「指」示)。

林「両」手のオ二、三指のはさみ状を交互に上下と止本の並んでいるかたちをする。

石田「石」と「田」(「左」手の開いた指の指へ右手の開いた指をおく)。

石谷「石」と「谷」(「手」をひろげ段々にさげる)。

西川「西」(「太陽」の落ちかたち)と「川」(「水」の流れるかたち)。

橋本「橋」(「橋」のかけられてゐるかたち)と「本」(「本」を開いて見ているかたちをする)。(三二二)

津幡「指」先を離し、手首を拍つ、

小松「オ」二、三、四指を繰にあて、次に手の平で下をおさえる。なお市や町をはっきりさせる時には手の平で

下をおさえるようにする

七尾「オ」一、二、三指を伸ばし、下をおさえる。

跡島「手」首を廻につける

金次「指」で跡をつくり、下をおさえる。

石川「『石』へ左手の甲を右手の掌で拍つ」と川「へいされるかたち」
福井「『福』へいめごを指でなせる」と井「へいされるかたち」

富山「両手のオニ、三指をつけ山のかたちをつくり、下をおさえる」

新潟「手の甲を指で二度なでる」

神戸「手を拍ち、次に交錯する」

大阪「オニ、三指で頭をたたく」

京都「太陽の形をかたち」

名古屋「両手のオニ指をまげ対立させる」

横浜「『再』で示す」

東京「太陽の昇るかたち」

日本「オニ、三指を口のところから右または下に移す」

韓国「手を開き指の先で頬をなでる」

中国「左手のオニ、三指に右手のオニ指をのせ、中々をつくる」

フランス「頭をかく」

アメリカ「オニ、三指で輪をつくり、目のところをつくようにする」

ニューヨーク「『アメリカ』と『建物』へい両手を下から上へ動かす」

イギリス「頬を手首でこする」

ドイツ「右手のオニ、二指ではきみ状をつくり、オニ指を頬につける」

ソ連「オニ指で頭を拍つ……（三三三）」

4. 太陽、動物、植物

日「唇を指示、次に両手の甲を外にしておいたものを内にする」

太陽「つぼめた指をひらきながら右から左へ移す」

地球 両手で丸いかたちをつくり、これをまわるようにする

月 三日月の弓形を二指でつくる。

土 頬を三指でつまみ、つまんだものを落とすかたち。

石 左手の平を右手の拳で拍つ。

鉄 左手の平を右手の才二、三指を曲げ指先で拍つ。

山 両手で山のかたち。

川 手の平を上、左から右に動かす

水 口のとこで緩く握った五指をひらく。指先は上になる。

海 両手をゆるやかに上下にしかも左右に動かし波のかたちをつくる。

雨 指先を下に向け下に動かす

雪 「白」へリ頬を指示しと、雨

あられ 「白」と「五」へリ才一、二指で輪をつくる。

雲 頬の前で手の甲を動かす。

晴 手を体の前から斜め上にもつていく。

火 下に付けておいた指先を上に向ける。

空 両手をひろげ頬の前でゆるく交錯させる。

嵐 手を斜め上から斜め下へ動かす。……ハ四一

動物 「牛」「馬」「など」へリ才一、二指のはさみ状を右へ移動させる（の緩急で示す

猪 才一、二指で輪をつくり、他の三指は握っておく。この輪で頬をなでる。

牛 才一、二指をはさみ状にして頬の右へつける。

馬 右手を開き、その手首を頬の右につける。

ねずみ あごに手の甲をつけ、才二、三指をまげながら動かす。

大 Ⅱ 右手のオ一指を線の右につけ他の四指をピクピク動かす。

歌 Ⅱ 手の甲を口先に当て、指先をまげピクピク動かす。

うさぎ Ⅱ オ一、二指を線のところで耳のかたちをつくる。

わに Ⅱ 両手の平でバクバクさせる。

うなぎ Ⅱ 左手のオ一、二指の間を右手のオ一指を通す。

象 Ⅱ 握った左手の上に右手の平を垂直におき、指先を左に向けながらピクピク動かす。

えび Ⅱ オ二指をまげ、跳ぶように前進させる。

いわし Ⅱ 両手のオ一、二指の四指をはじめつけておき、次にその四指を左右に開き、これに「象」をつけ加える。

鯉 Ⅱ 右手の平を下に向け、ペンペン前進させる。

鯛 Ⅱ 「赤」(リ鶴の指爪)と「象」

鳥 Ⅱ 右手の平を垂直に線にあて、次にあごにあてる。

からす Ⅱ 髪をなで(リ「黒」)両手をひろげ指先をフラフラさせる。

蛙 Ⅱ 右手のオ一、二指で輪をつくり、喉を整くうつ。

虫 Ⅱ オ二指をまげピクピク前進させる。

かに Ⅱ 両手のオ一指を組ぬ、他の八指はまげて下に向け、揺うかたちをする。

いか Ⅱ 両手または片手を頭上にのせ三角をつくるようにその手を線のところへ移す。

たこ Ⅱ 口の前で手を握り、開きながら前へ出す。……(四一三)

植物 Ⅱ 「花」(リ握った手を開く)と「もの」(リオ一、二指のはさみ状を右に移動させる。

木 Ⅱ 両手の指先を下から上にする。

草 Ⅱ 左手の指を右手でむしるようにする。

花 Ⅱ 「咲」(リ握った手を開く、指は上)と同じ。

兼〓両手の才一、二指で夢のかたち、はじめこの二つの兼形をつけておくがやがて左右に引くという。

松〓「花」と同じ

梅〓右手をつばめ口のところから頭部の右方へもって行く。

松〓才二、三指で横をつく

竹〓「松」と「竹」(〓両手の才一、二指で二つの輪をつくり、輪の周を二三回回し、竹の節を示すようにで

ある)の組合でより判然するという。

夢〓左の才一、二指で横円をつくり、これに右の才二指で筋をつけるようにする。

氷〓掌の右わきで才一指の腕を才二指でなでる。

玉〓ねぎ〓左手の腕を切り、からい感情を加える。

ねぎ〓「玉ねぎ」と「長いもの」(〓両手の二つの輪の上を上下に回す動作で示す)。

にんじん〓「赤」と「長いもの」

大根〓「白」(〓腕を指示)と「長いもの」。

ごぼう〓髪を指示(〓「髪」)、左の才二指を右の才二指でけする。

きうり〓頬をなであげ(〓「青」)、手の甲をなであげ(〓「緑」)、両手の指で、二つの輪をつくり、左

き上、右き下、下の輪をしぼりながら下に移す。

梨〓才二指を顔の前で左、上、右、上に動かす。

柿〓才一、三指で輪、才二指をはなしておく、次に才一、五指をはなし他の三指を握る。

みかん〓左手のつばめた指を右手の指で夜でもかくようにする。

りんご〓唇を指示、左手の丸めた甲を右手でうつ。

栗〓下唇を才一指ではじく。

くだもの〓「みかん」と「など」。

こんがり両手をひろげ、指先を上にして上方にユラユラ動かす。……(四一三)

(口) 吹く、長い、黒い、甘い、
 噴れる 〓 右の甲に左の平をつけ、それを左右に開く。

吹く 〓 手を右上から左下に動かす。口で吹くし（リ口で吹くかたち、または指をまげた手の平を口のところから前方に向ける）とは別である。

降る 〓 両手をヒラヒラさせながら下におろす。

流れる 〓 手の平を上にし左上から右下に動かして行く

止む 〓 手の平を下に向け 下におろし、一、二、三指に一枚をつけ止むかたちをする

咲く 〓 「花」と同じ

散る 〓 手の平を上に向け上から下におろす。

落ちる 〓 前方で手を斜上から斜下へ。

浮く 〓 片方の手の平から他方の手を浮くようにあげる

ふえる 〓 両手を上下に開く

たまる 〓 左手の平に右手をつけ、次にその右手を高くあげる。…… (四二一)

大きい 〓 両手をひろげる

小さい 〓 手をひくところにおく

長い 〓 両手を左右に大きく開く。

短かい 〓 両手の一、二指の二本をつけながら、両手を左右に開く。

高い 〓 両手を左右に少し開く。

低い 〓 二指で上を指示。

ひくい 〓 両手を上下に少し開く、背高の小さいことや頭のひくいことにもなる。

広さ 〓 右手で体の前で広く大きく輪を描く。

深さ 〓 手をひろげ、下をおさえる。

丸い―指でそのかたちをつくる。「丸」も同様である。……〔四二二〕
黒い―髪を指示。

白い―歯を指示。「白」も同じ。

青い―頬をなであげる。「青」も同じ。

緑色―左手の甲を右手でなであげる

黄色―オ一、二指をひらき、オ一指は上方にオ二指は水平にしておく。次にオ一指を水平、オ二指を下方に向ける。

赤い―唇を指示。「赤」、「赤く」も同じである。

早い―オ一、二指を肩を、早く動かす。「早さ」、「早く」も同じである。

整い―拳を胸にあてる。

多い―オ二指の指腹をオ一指でなであげる。

少い―オ二指の指先をオ一指ではじく。……〔四二三〕

美しい―左手の平を右手の平で靜かになでる。

うすい―オ二、三指の指腹をオ一指でなでる。

かたい―右手のオ一指と他の四指でコの字形をつくり下方をひたくつよくおさえるようにする。両手を使って
もよい

やわらかい―「かたい」と同じかたちでゆるくおさえる。

おいしい―頬をたたく。

甘い―手の平を口のところで上から下へ移す。

辛い―五指をまげ口のところで動かす。表情が痒う。

暑い―腹・胸を下から上にかきあげる。動作が大きい。

暖い―胸のところを少しかきあげる。

涼しい」「寒い」より動作が小さい
寒い一両腕を体につけかたがたふるえるかたちとする。……〔四二四〕

54) 五〇、オ一

教「一」(「」オ二指を伸ばして出す)。「二」(「」オ二、三指の二本を出す)。「三」(オ二、三、四指を出す)。「四」(「」オ二、三、四、五指を出す)。「五」(「」オ一指を伸ばして出す。または五指を開いて出す)。「六」(「」オ一、二指)。「七」(「」オ一、二、三指)。「八」(「」オ一、二、三、四指)。「九」(「」五指をつけたまゝ横にして出す)。「一〇」(「」オ二指を曲げて出す)。「二〇」(「」オ二、三指を曲げて出す)。「五〇」(「」オ一指を曲げる)。「六〇」(「」オ一、二指を曲げる)。「一〇〇」(「」オ二指で線を引く。または左手の平を右手のオ二指でかきあげる)。「一五〇」(「」オ一指で線を引く)。「九〇」(「」五指を揃えて手の平をかきあげる)。「一〇〇〇」(「」千の字を書く)。

半分「」右手を体の前から右に動かす。

三人「」三「」(「」オ二、三、四指)と「」入「」(「」入の字を書く)。

フランス「」オ二指で十の字を書く。

序数「」オ一「」(「」指で輪をつくり、この輪を開き、次に「」一「」。以下、教の場合と同様である。

月名「」一「」月「」(「」一「」と「」月「」。以下同様である。……〔五一一〕

(四) 前・今

前「」前を指示。

後「」手を下、後へやる。

上「」指示。

下「」指示。

左「」指示。

右「」指示。

東＝左手の平の下から右手のオ一、二指でつくった輪をくぐらせて上に出す。

二こ＝オ二指で下を指示。

そ二＝指示。

あそこ＝指示。

向う＝指示

速く＝オ二指をゆるく遊びながら指示。……〔五二二〕

今＝両手で下をおさえる。片手でもよい。

今日＝「今」と同じ

昨日＝オ二指を肩のところで後をさす。

一昨日＝オ二、三指を肩のところで後をさす。

昨年＝左拳を右手のオ二指でうち、肩の所で後をさす。

一昨年＝左拳を右手のオ二、三指でうち、肩の所で後をさす。

明日＝オ二指をまげ、目の所で動かす。

明後日＝オ二、三指をまげ、目の所で動かす。……〔五二二〕

なお、両手と記してあつても片手でよいことがある。右手を左手と区別のあるように記したが、これは便宜的なことが多い。

項目は区別してあるが、語形の同一なものがある。体言的なものが用言的なものと、また體体的なものが、用言的なものと同一語形である。

語形は広い内容を含み、他の要素によつて限定を受ける契がある。表情の伴なうことや立場による差異を見落したり記入しないものがあるからであらう。

五、詔法

格は詔序ともいふべきもので示される。インフレーションやコンジューションにあたるものはない。いわゆる竊立詔に似ている、助動詞なものはあるが、接続詞や終助詞にあたるであろうか。助動詞風なものも見当らない。立場や文脈などからこの機能を果すようである。

1(4) 挨拶、応答

どうぞ一方の甲を他方の平の上にすべらせ相手にものをすすめるかたち、
ありがとう一方の甲の上に他方の平手を垂直におく。

今日は、一、二、三指を立て、おき次に曲げる

お早う、一、二指をさげる

お休みな、一、二指の甲を下にし両手を重ね、磨るかたち

さよなら一、二指を振る。……(一一一)

はい、一、二指を指示、頭を少しさげる。

いいえ、一、二指を指示、手を振る。

同じ一、二指を一、二指と拍つ。

ちがう一、二指をはさみ状に開き、振る。頭を左右に振つてもよい。

よい一、二指で胸をうつ。また拳の五指を下にして下をおさえる。(「断定」)

悪い一、二指を二指でぬく。

だめ一、二指で鼻をはじくようにする。

好き一、二指をつまむ。

嫌い一、二指で胸をつく。

すみません一、二指の手の平に他方の手を垂直におく。

しまったノ。手を頭にやる。

こつけいだ。鼻で鼻をうつ。……〔一二三〕

(四) 否定、疑問、命令

否定。手を振り、これを止める。

ない。手を振る

行かない。指を胸にあて（「自分はい」）指で前をさし（「行く」）次に手を振る（「否定」）。

誰もない。指の背で頬をかきあげ（「誰も」）指をひろげ（「いる」）次に手を振る（「否定」）
どちらか分らない。指を左右に振る

笑しくない。「美しい」と「ない」……〔一二一〕

何を欲しいか。二指を動かす（「何」）のどき引く（「欲しい」）次に手を開き前方へ出す（「疑問」）
あるか。手の平を手にして下方をおさえる（「ある」）次に手をうらがえし手の平を上に向ける（「疑問」）
君は何をしているか。相手を指示（「君」）二指を立て動かす（「何を」）手の平を下に向け、下
きおさえ、次に手の平を上に向ける（「いるか」）

これは花か。そのものを指示（「これ」）曲げた五指を開く（「花」）首をかしげる（「か」）
知っているか。鼻で胸をうち、その手を開く。……〔一二二〕

早く来い。二、三指を早く胸の所へ動かす（「早く」）二指を手前に引く（「来い」）
行け。「行く」と表情

行くな。「行く」と表情

インキがあるなら下さい。頬を指でなでる（「青」）ペンでインキをつけるかたち（「インキ」）手の平
を下にし、やがてうらがえして、上にする（「あるか」）一方の手の平に他方の手の甲を重ねる（「下さ
い」）。……〔一二三〕

2. (1) 人形・場所など

だれも指の背で頬をかきあげる。

だれか「オ」二指の背で頬をなであげ、次に握った手を開く。

なに「オ」二指を動かす

どれか「そのあたりを指示、指を動かす、次に握った手を開く。

いつ「指を口に折って首をかしげる。

いつか「指を折りながら、やがて握った手を開く。

どこ「オ」二指を動かす

どこか「上方を指しながら「オ」二指を動かす、次に手を開く。

どこに「オ」二指で斜上をさしながら振る。同時に表情を度う。

どうして「オ」二指で前方を指し振る。

どうするか「片方の手の平の下に、他方の「オ」二指を通して次に握った手を開く。………」(三二)

私「指示、オ」二指で鼻を

色「指示

あなた「君」に同じ。

級「指示

彼女「オ」五指を出し（「オ」女）次に指示する。

あれ「指示。遠くを見る表情が片う。

あの人「指示

それ「指示

これ「指示………」(三二)

そうです「手の平をたたく。「そうだ」に同じ。

私のはこれです。自分の鼻を指示（「これは」）自分の胸を指示（「これだ」と同じい）。

私が話します。相手の方から自分の口へ開いた五指をもって来る。

差しあげます。手の平を上にして先方へ進める。

私が貰います。両手の二つの平を固め、先方から手前にゆるく引く。

いいません。口に手をやり、次に手を振る。

知りません。手を左右に振る。「知らない」と同じい。

分りません。胸をかきまじるようにする。………【一三】

(四) 彫飾、接離

木の舟。両手のオ一、二指の四指で輪をつくり、この指先を上にあげる（「木の」）両手で水でもすくうか
たち（「舟」）。

鼻の頭。手の平をヒラヒラさせる。（「鼻」）頭をたたく（「頭」）。

体の垢。右の拳で左手を二すり、次に唇を指示（「赤」）、「垢」。

耳のあか。耳と唇を指示。

壮。「牛」と「男」の順である。

牝。「牛」と「女」の順である。

三つの野。「三」と「野」

二人の人。「二」、「人」（「字で示す」）、「ひと」（「両手のオ一、五指をひらき他の三指は握る」）。

赤い花。「赤」と「花」の順。しがり、どちらを先にするかは便利にすると答えた。

走る馬。前足のかけるかたち（「走る」）両手をひろげ指先を上にして動かす（「馬」）。

早い車。オ一、二指をひらき早く動かす（「早い」）手を腰のところにあてる（「車」）。

赤く咲いた。「赤」と「咲く」

ボトボト降る。両手のオ二指を交互にさげる（「ボトボト」）手をひらき交互にさげる（「降る」）。

ヒューヒュー吹く。手を斜上から斜左下に動かす。………「二二二」
しかし下に向けておいた手の平をうらがえし上に向ける。
けれども「しかし」と同じい。

また「はじめオニ指の爪を出しておき、次にオニ指も加えて出す。
または「オニ、三指を揃いとまま右から左へ移す。

もしも「右側のところを散らすときのかたちでうつようにする。
それから「揃いとままの手を右から左へ移す。

後から「指先は揃い手の平は前に向ける。………「二二二」

3(4) 終了、可能など

終了する「両手のオニ指はオニ指、オニ指はオニ指で別々にうつ。

終了した「終了する」と「完了話形」(いま版にこう名づけておくが、その動作は手の平を下に付けて下を
おさえるようにする)。

また「普通の場合は「来る」に同じい。より判然とさせる場合はさきの完了話形をつけ加えるようである。

読んでいた「普通の場合は、「読む」に同じい。完了話形を加えても「読んだ」と誤同するようである。使っ
て「読む」と「居た」を誤合させるより外に方法がないであろうか。………「三二二」

「知る」と「知っている」、「雨だ」と「雨だろう」、「雨だった」と「雨だったろう」の区別も一応は無い
と書いている。動作が完了したことを示す話形を完了話形と名づけたがこれも「場所」や「現在」の内容をもつ
ことがある。例えば和市の名称には二の話形が附属する。また「いま」や「二二二」も二の話形で固に合うよう
である。

およげる「およく」(「両手の平を下にして泳ぐがたち」に同じい)。

見られる「「見る」(「目のところでオニ、三指で輪をつくりこの輪を前方に出して行く」に同じい。
聞かれない「「聞えない」(「耳をうつ」に同じい)。

知ることが出来ない「知らない」(「胸をかきあげる」に同じい。……〔三一三〕)
要するに可能の活形はないようである。使役や受身についても同様である。

(四) 複教、程度など

私たち「自分の指示とその辺りの指示

友だち「両手でにぎり」(「「友」」左右をながめる「「複教活形」」)

親類「両手のオー、五指を揃え、他の三指を握る。右手の三指の曲げた背を左手の甲につけてなでるようにする。
入々「両手のオー、五指を揃え、他の三指を握る。この両手の甲を夫々外側にして対立させ二つの手を動かす。

料々「右手のオー指を立て、その爪を鼻のところに置く、次にこの指を前方に離す。「村」と同じいようである。……〔三二二〕

食物だけ「口に指をつまめてあてる(「「食う」」オー、二指のはさみ状を右に動かす(「「もの」」オ二指
で打つように断定する)たち(「「うだけ」」)

犬など「「犬」と「もの」

このくらい「「行方の甲に他方の手の平を垂におき、二するようにすべらせる。

京都から「「京都」と「から」(「「手を右から左へ引く」」。

暑いから「「暑い」と「から」(「「揃いた手を右から左へ」

ゆくので「「ゆく」と「ので」(「「垂直においた手の平を上に向ける」

行ったり来たり「「前方の指示と手前の指示。

金があつたならば「「オー、二指で輪をつくる。手の平で下をおさえるようにする。……〔三二二〕

その他「「これを取るせ」の「せ」、「かなしいよ」の「よ」、「うれしいな」の「な」、「あいつは馬鹿さ」
の「さ」などは分らないと答えてゐるが、よく注意すれば、このようなものを表情によつて誤していることもあ
るであらう。

六、おわりに

さきに「ろう」の韻音を、今度は「ろろ」の手紙を取ったのであるが、体系をなさないことに決りがたい。かなり前から、このような韻門に興味と関心をもちながら、あつところもなく日を過ごして来た。それを二二まで通ひ得たのは全く漸業者金橋亮氏の好意ある力添えによる。たゞ深く感謝する。

石川ろろ学校の寺西七郎氏、鉢野正久氏、小島齋雄氏からも多大の援宜が与えられた。また上野学園の春藤平氏、ろろ学校の木村哲夫氏からは何かと世話になった。生徒の遠水増一馬は忍耐強く長期にわたり教えて呉れ有難いことに思う。

過去の業績を手にし得なかつたので、さらに調査し、専門家の奨励をと思うが、メ切は既にすぎその余裕はない。欠点の多い不備なこの小篇を教示と指導によって少しでもよくすることが、出来るならばまことに幸である。